（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　多代田いわみ

本論文は、従来からドイツ近代抒情詩の一頂点をきわめたと目されている詩人ライナー・マリーア・リルケ（Rainer Maria Rilke, 1875-1926 ）の、なかんずく中期から後期にさしかかる時期の諸作品をとりあげて、その基本構造の特質を明らかにしようとしたものである。

『新詩集』(1907) および『新詩集別巻』(1908) に代表されるリルケの中期作品は、通常、詩人が師事したロダンの彫刻作品を規範としている、「事物詩（Dinggedicht)」の理念によって特徴づけられている。しかし、ほぼ時期をおなじくして書かれた小説『マルテの手記』(1910) において、すでにその萌芽がみられるように、「物（Ding)」にかわって、以後、あらゆる「物」を包容すべき「世界内部空間（Weltinnenraum)」の理念が提起されてくるようになる。それは、十年余の歳月をかけて『ドゥイノの悲歌』(1923) が執筆されていく、ちょうどその時期にあたっているが、はたしてこの理念は、『悲歌』のライトモティーフを構成するものである。そのこと自体、ことさら新しい知見ではないが、筆者の強調するところは、生と死の双方の領域を含むといわれる、プルーストに通じる回想の空間でもある、この「世界内部空間」が、あくまで視覚に依拠していた「物」とは様相を異にして、ボードレールの詩『万物照応』にも看取されるような、広義の象徴主義ともいうべき、さまざまな知覚を統合した「共感覚」によって表現されていること、なかでも聴覚の優位に基づいていることである。そうした主張によって、詩人のいうところの「世界内部空間」は、いまや「死者の声」を内実とする同一性の空間として位置づけられることになる。中期から後期にいたるリルケの作品の発展を、部分的に知覚の変容に焦点をあわせて論じた研究は、従来も存在しなかったわけではないが、これほど総合的かつ徹底的に分析した論文は、ドイツ語圏においても例をみない。

本論文は、細部において、ややもすると強引な論述がみられはするものの、参考文献を博捜しつつ、他方で首尾一貫した論理を構成しえた力量は、十分に評価されるべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。